

子どもたちに思考の「すべ」を

獲得させる取り組みは、

先生方の「意識」の統一から

「教えない」ことへの不安をどう乗り越えるか

『hito*yume29号』にて角屋重樹先生の「子どもたちが『自分で考えられない』のは、考えるための『すべ』を獲得させていないから」と題する記事を掲載したところ、「子どもたちに思考の『すべ』を教えるにはどうすればいいのか」「先進事例を詳しく知りたい」といった反響を多くいただきました。そこで今号では「子どもたちに思考の『すべ』を獲得させる具体的な方法」について、角屋先生にあらためて教えていただきます。



日本体育大学大学院
教育学研究科長

角屋 重樹

かどやしげき*昭和24年三重県生まれ。広島大学大学院教育学研究科教科教育学（理科教育）専攻博士課程単位取得退学。博士（教育学）。広島大学教育学部助手、宮崎大学教育学部助教授、文部省初等中等教育局教科調査官、広島大学大学院教育学研究科教授、国立教育政策研究所教育課程研究センター基礎研究部部長を経て、現在、日本体育大学大学院教育学研究科長、広島大学名誉教授、国立教育政策研究所名誉所員、日本教科教育学会常任理事。著書に「改訂版 なぜ、理科を教えるのかー理科教育がわかる教科書ー」、「今なぜ、教科教育なのか」（共に文溪堂）など多数。

思考の「すべ」を「教える」ことができない

前号でも述べましたが、まずご理解いただきたいのは「思考の『すべ』は子どもたちに教えるものではない」ということです。私は「子どもたちに思考の『すべ』を獲得させる」と表現しています。前号の記事に関する読者アンケートで「子どもたちに気づかせると表現された方がいらつしやいましたが、正にその通りでしょう。」

子どもは教えられたり、与えられたりするのはなく、自分で実際に「すべ」を使って初めて、その意味に気づき、獲得しよう、使えるようになるという気持ちが生まれます。

このように、能動的な態度で自ら獲得した「すべ」でなければ、毎回状況の異なる様々な場面で、他者からの指示を待つことなく、応用的に用いることはできません。

だから「すべ」は教えることができないのです。

思考力とは何か ——学校全体で目指す方向をそろえる

では、子どもたちに「すべ」を獲得さ

せるためにはどのような取り組みが必要なのか。前号でも紹介した川崎市立東菅小学校の例で見ていきましょう。

同校では、教師の指導力向上の目標を「子どもたちの思考力育成」に焦点化しました。校内研究はもちろん、先輩教員から後輩教員への日常的なアドバイスも、それを軸として行われました。全員が同じ方向を向いているため、成果や問題意識の共有化が促進されました。

それを土台とし、同校では、「子どもたちに育てたい資質・能力」について

- ① 子どもが自分自身を見つめる力（メタ認知力）を育成する
- ② 子どもが他者から学ぶ力を育成する
- ③ 子どもが経験や既習を関連づけて、問題を発見し、解決する力を育成する

——として取り組みました。

このうち、思考の「すべ」との関係が最も深いのは③ですが、同時に、同校の先生方が実践に結びつけていくことに苦労したのも③でした。

子どもが③のような能力を獲得するためには、まず先生方自身が「経験や既習を関連づけて、問題を発見し、解決する」ことを理解しなければなり



「語型」を子どもたちの言葉から拾うことができるのも、教師の間で共通の認識ももっているから。

ません。そのために、同校では「『経験や既習を関連づけて、問題を発見し、解決する』とはどういうことなのか」という議論が、会議や校内研などあらたまった場だけでなく、日常的に繰り返されました。

「思考力」とひとことで言いますが、この言葉が表していることがらのイメージは、実は一人ひとりかなり違ってきます。そのままの状態でも子どもたちの思考力育成に取り組んでも、その内容は教員ごとにバラバラになってしまい、参考になる部分の導入や改善案の検

もちろん、学校全体での方向性の統一と並行して、教員個々の努力や工夫も積み重ねられました。

そこで興味深いのは、ベテランの先生、いわゆる「力のある先生」ほど、苦労が大きかったということです。

従来の「教える」ことに慣れている先生にとつて、「教えない」という授業は教師としての不安を掻き立てられるだけでなく、教師としてのこれまでの取り組みを自ら否定するかのような葛藤があった——と聞いています。

(詳しくは、『東菅小学校の7年間の物語—思考の「すべ」を獲得した子どもたち—文溪堂刊をご参照ください。)

ただ、このような厳しい状況を乗り越えるために有効だったことも、やはり

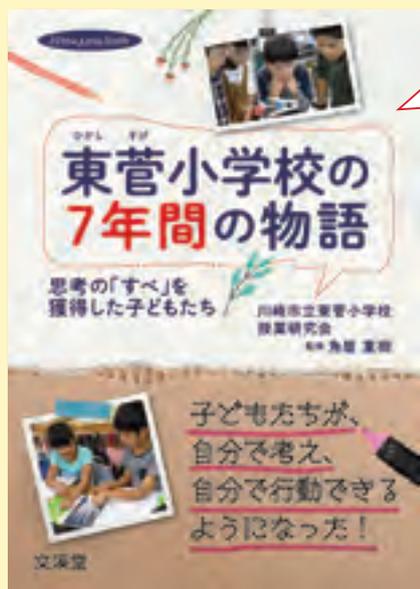
ベテランほど葛藤し苦しむ「すべ」を獲得させる指導

討もうまくいきません。

東菅小学校では、学校全体で「思考力とは何なのか」「そのために授業の中で何を指すのか」などの方向性を統一し、共通の認識をもつて取り組んだことで、子どもたちが「すべ」を獲得し、思考力を高めることが可能になったといえるでしょう。

夜陰に紛れてメダカを獲りに行く!?

「ワクワク感」を仲間と共有することが教師としての喜びを再認識させてくれた!



川崎市立東菅小学校授業研究会 著
監修 角屋重樹
日本体育大学大学院 教育学研究科長
●A5判、192ページ ●定価2,000円+税

2020年春 新学習指導要領 全面実施!

- 思考力・判断力・表現力の育成
- カリキュラム・マネジメント
- 主体的・対話的で深い学び

このすべてが 詰まった1冊!

ごく普通の公立小学校が、どうして全国からの視察が絶えない、数少ない先進実践校となったのか——。その取り組みを、現場に立つ教師の肌感覚で解き明かします。

「教えること」が授業なのか?

学校全体としての意識の統一であったことは、念頭に置くべきでしょう。ベテラン、若手を問わず日常的に互いの授業を見合い、感想や意見を交換することで、ベテランの知恵と若手の新しい感覚の両方を生かすことができました。

「すべ」を子どもたちに教えることができないのと同様、「すべ」を獲得させ

るための定型的な手法もありません。強いていえば、先生方一人ひとりが「すべ」を理解し、獲得することといえるでしょう。

だからこそ、それを可能とする学校をつくりあげた東菅小学校の取り組みが参考になると考えています。